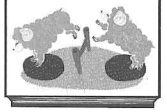
ま・え・が・き

上方文化評論家　福井栄一

「百年に一度の名作」「感動巨篇」といった類の惹句は
世にあふれているが、
タイトルにわざわざ「ぐっすり眠れる」と謳った本は、稀であろう。
「羊が一匹、羊が二匹・・・」と数えるが如く、
読みはじめるやいなや、退屈のあまり、

すぐに眠くなるという触れ込みだから、
少しでもおもしろい箇所があったら、
「羊頭狗肉」と非難されるのだろうか。
筆者としては、妙に落ち着かない。
羊頭狗肉か、狗頭羊肉か。
要は、読者諸賢のご判断次第なのであります。

第1話：『干支の羊』



むかしむかし、神さまが動物界におふれを出した。

「一月一日の朝、わが屋敷へ新年のあいさつに来なさい。

早く来た者から上位十二頭に限り、一年交代で、

動物界の王に任ずるものとする。」

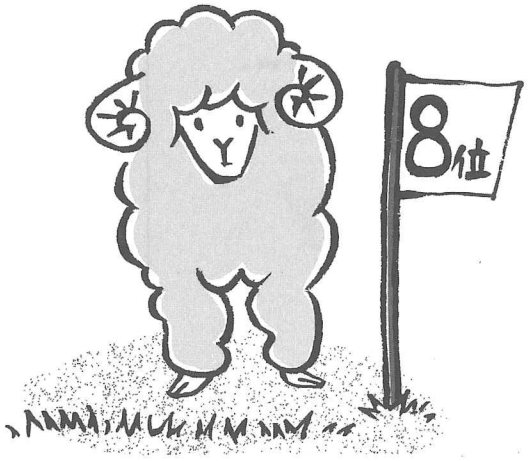
これを聞き、我先にと神さまの屋敷へ押しかけ、みごと上位入賞を果たした十二頭が、おなじみの「干支」の動物たちである。すなわち、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥のこと。

これらのうち、「りゅう（＝龍）」だけが想像上の生きもので、あとは実在の動

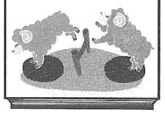
物である。

また、日本に野生種が棲息しない動物が、二種、含まれている。虎と羊である。

一方は獰猛な肉食獣、他方は温和な草食獣。偶然とはいえ、対照的なとりあわせである。



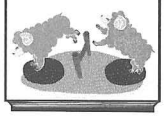
第2話：『羊の語源』



むかしは、時刻を十二支であらわした。午前零時から二時間ごとに十二支を割りふっていけば、一日二十四時間をうまく表記できる。午前零時は「子の刻」、午前二時は「丑の刻」、午前四時は「寅の刻」・・・のごとくである。また、そうした「○の刻」をは

続きは本書をご購入ください。

第10話：『羊太夫の伝説（二）』



前話で紹介した伝説では、超人的に足が速かったのは小脛という従者であり、羊太夫は主人として、ただ馬にまたがって牽かれるだけであった。

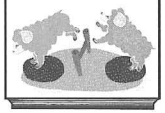
ところが、十四世紀中頃に成立した説話集『神道集』では、羊太夫は従者として登場するばかりか、みずからひた走る。

同書によれば、羊太夫は、履中天皇の御代、上野国の地頭である伊香保大夫に仕えていた。

異様な俊足を誇り、午の刻（正午）に多胡を出発すれば、未の刻（午後二時）には都へ到着して、朝廷の指令を承ることが出来た（それも、羊太夫と称された

続きは本書をご購入ください。

第77話：『命拾いした羊』



続いて、『今昔物語集』巻第九第十九話。

趙士の家の宴席に招かれた客が、ふと庭先を見ると、かわいい少女が首に縄をかけられて柱につながれている。少女が泣きながら訴えるには、「私はこの家の娘です。白粉欲しさに親の金をくすね、台所の北西の壁の裏に隠しました。しかし、使わぬうちに命が尽き、罪の報いでこんな姿に・・・」と言うが早いか、羊に変じてしまった。驚いた客が趙士にその少女のことを詳しく話すと、たしかに顔かたちが数年前に亡くなった愛娘にそっくり。おまけに、台所の件の場所には、本当にお金が隠してあった。そこで、趙士は、宴会の料理用に買ってあった庭

続きは本書をご購入ください。

第100話：『羊が一匹、羊が二匹・・・』

不眠の夜、寝床(ねどこ)の中で、「羊が一匹、羊が二匹・・・」と数え続けると、自然に眠気(ねむけ)が襲ってきて、いつしか安眠出来るという。結構広まっている俗信（民間療法？）だが、誰がどんな状況で思いついたのか、どんな風に各地へ伝播していったのか、実はよくわかっていない。それを本気で悩み始めると、それこそ寝られなくなる。「羊飼いが寝ずの番をしている時に、羊の頭数を数えたのが起源」という説もよく聞くが、肝心の番人が数えながら寝てしまったら元も子もないから、どうも的外れな気がする。いずれにせよ、羊は動き回るから、数えるのは大変だろう。そう言えば、こんな話がある。昔、奈良公園の鹿を数えあげようという物

続きは本書をご購入ください。

あ・と・が・き

上方文化評論家　福井栄一

このページへたどり着いたのは、
本書を辛抱強く通読してくださった奇特な御方か、
どんな書物も最後から読む「あとがきマニア」か、
いずれかであろう。
目次では百話と謳っているが、

本書に登場する羊は、それよりずっと多い。
「羊が一匹、羊が二匹・・・」という具合にして、
その数を見事数え終わりましたら、どうか、
本書の出版に尽力してくださった
技報堂出版株式会社の石井洋平編集部長まで、その旨、お知らせください。
賞金は出ないでしょうが、深甚の謝意を表してくださると思う。
ちなみに、未歳（ひつじどし）のお次は、申歳（さるどし）。
十二支獣シリーズも、はや十冊目となる。お楽しみに。